

この意味で既記載の属種に就いても再検討する必要がある。また Sparrow (1936) が *Diplophlyctis* で見出したような原始的な (或は退化した) 有性生殖器官の存在、或は Olpidiopsidaceae の諸属に見られる附属体 (Companion cell) の意義なども系統を明にするための有力なカギとなるのではないかと思はれる。(未完)

## ○ 植物學用語と當用漢字 (前川文夫) F. MAEKAWA: Japanese botanic terms written with Chinese ideographs in Japanese official use

植物学殊に分数学の記載用語がいかにめづかしい漢字を使うものが多いことは従来でも定評があつた。たとえば葉莖花序 (ジユウテイカジョ)、穎と稃、羊歯植物、糙藚、毛茸 (モウジョウ)、回旋褶疊襞 (カイセンシュウジョウヘキ) といった風である。同じオシベにしてもユーズイとも読み、その上、シベ又はズイの字に蕊、蕊、藥、莖、等々いろいろの漢字がいろいろの場合に使われている。これらは歴史のある文字解もあり、使用開始當時は適切であつたものも多いのであるが、何といつても一般には理しにくくなっているのを否定はできない。

こういうめづかしい表現ではなしに、もつと身近かなやさしい言葉でいい表わしても、学問の本質や内容を少しも傷つけるわけではないから、もつとやさしい言葉と文字にしようという考えは従来もあつたので、たとえば公表はされなかつたけれども日本植物学会が全科技聯と共同して委員を出して作つた用語の草案なども戦争中にすでに一部印刷になつていて、それを見るとまことに思い切つた程に漢字の使用廃止とそれにつづく新語の造成とを行つている。たとえば小穗をコボと改め、花序をハナツキとしている程度にこなしてある。

戦後になつて、再びこの用語の難解と不統一とを何とか整理してもつと便利なものにしたいという氣運が起つて來て昭和 22 年 3 月に日本植物学会がこの仕事を当時の日本學術會議の中に出來ていた學術文獻調查研究特別委員會の一部科会として完足した學術用語制定科会と協同して手をつける事になつた。学会では委員をえらんで高等学校の参考書 (といつても池野先生の系統学や坂村先生の生理学を含む程度にしたのであつた) までの主な書籍を選んでその中の用語を集録して、まず差し当りの草案を作つた。このカード記入とカード整理は折柄の物資缺乏の中にかかわらず協力者の熱心ですゝめられて、23 年秋には 365 頁にのぼる部厚い謄寫版刷の草案となつて出來上つた。これの多額の印刷費は文部省が好意で負擔してくれたのであつたが、その間の斡旋は百瀬靜男博士の努力によることが多かつた。こうしてできた草案を各大学の植物学教室や研究機関やその他の関心を持たれる個人に送つて各語についての可否、取捨、改訂、意見、などを記入してもらい、これを送りかへしてもらつたのを再び集録して、第二のもつと切実な

用語を主にした草案ができ、これも近く印刷が終ることになっている。

日本植物分類学会でもこれに協力することとなり、この用語と平行して科名整理に対する資料の蒐集とその印刷が行われていて、津山尚博士が種子植物を、伊藤誠哉、今関六也、小林義雄三博士が菌類を擔当されたものはまもなく印刷が終る處までこぎついている。その他の分野の科名の資料も追々集る事と思われる。

さて話はもとへもどるが上記の第二の草案を中心にして各学会からの委員が関係の他の分野、たとえば農学、薬学、医学、動物学の専門家と連絡をとりながら問題を處理して、よいやさしいしかも正しい用語を決めて行こうというのである。

こゝでさし当り問題となるのは当用漢字の適用の問題である。当用漢字は官廳の用語その他に対する基準であつて、決して強いるものではないというが、しかし教育面では小学校の教科書はもとより高等学校まで、当用漢字を使用しないと事実上いけないことになっている。普通教育が専門科学と全く別ならば問題はないが、そういうことは全くありえないから、当然専門科学が使う適格な定義をされた言葉とその内容とが用いられてしかるべきもので両者がちぐはぐであつたり再度の置きかえを必要とするのではまことに無駄である。この事はあたりまえの事だが、当用漢字の表には自然科学では当然という程に基本のありふれた漢字又はその讀みが往々にしてない事が用語の整理の大きな痛であつたように見受けられる。藻が当用漢字にないのでソウ類としたり、游走子の游がないからこれをオヨギコ（泳ぎ子）といつたり、葯がないからコナブクロと直したりするのが一方の教育界に用いられるかと思えば、専門分野ではこういうのを全く受けつけない。これでは切角一方で教育された若い人達が専門分野に入る時に二重の手間をかけて又覚え直すことになるし、専門分野の知識を全く高踏的に一般から距てゝ置くことにもなつてよい事とは思われない。なるべく摩擦を少なくし且つ又將來のことを考慮して用語がきめられなければならない。

元來日本語はいわゆる大和言葉だけでは語彙が不足であつてとても現在の複雑な諸概念を現わす言葉を組立てることはできない。漢字漢語の流入があつてこの音讀みを併用し組合わすことではじめてたくさん概念があらわされることを得たので、この漢字のよい効用は無視できない。歐米の言葉はギリシア語とラテン語とを十分に馳驅して細かい新しい概念を必要に応じて作つて行くことが実に容易なのであるが、日本語における漢字の意義はまさにそれに當つていると思われる。しかし必要以上にむずかしい文字が入り、又それが少々好んで使われる風があつた弊害は当然改めて然るべきである。しかし、從來その漢字を使つていたために概念がまことによく掴むことができたのに、劃が多いとか、他につかわぬという點でだけで廢止して却つてその概念をむりした別の言葉で新造せざるを得ないようなものは、寧ろ残すとか、まぎれなければそれを発音通り假名書きにすとか、よく似た文字に置きかえて使うとかの三つの手段のどれかが原則として用いられるのが適當であらうと思う。上の例でいえば藻類はこのまゝ存置して藻

を当用漢字に復活し、游走子はこのある遊に置きかえて遊走子とし、葯は支那では藥の略字によく使っているが日本では花粉嚢を主とする雄性器官以外に使い途がないから漢字は捨てマヤクという假名にするといった程度に整理されて行けばよいのではないかと思うのである。

幸い、昨年末には國語審議会が改組されて、自然科学分野の人達も委員に加わり、全体が打ちとけてもつと広い視野から当用漢字についても考えるという氣運がでて來るときくのは喜ばしいことである。そこで分類學の方でも当用漢字の精神はよいが、その運営と適用範圍には若干の修正が行われてしかるべきであるという見地から、いくつかの意見がでてよい、いや出るべきではないかと思う。それについて少し述べてみたい。

比較的使用される漢字であつて当用漢字にないものを拾つてみると次のようなものがある。( )内がそれである。稍々稀に使用するものは除いた。前述の藁薺や糲の如きでこれらはもちろん当用漢字に入っていない。

(灌)木, (喬)木, (胚), 孢子(囊), (禾)本, (穎), (腋)生, 円(錐)形, (披)針形, (篩)管, (藻)類, 蜜(腺), (萼), (葯), (鱗)片, (稈), (腊)葉, (擔)子, (繖)形花序, 狹(窄), (挺)莖, 群(叢), (硅)藻, (頸)細胞, (托)葉, (嫌)氣性, 二(叉)分枝, (剛)毛, (橢)円形, 呼吸(腔), (糊)粉粒, 葉(鞘), (蒴), 葉(隙), (翅)果, 收(斂), (彎)曲, (鞭)毛, (瘦)果, (苞), (蛋)白質, 虫(癭), (蔓)植物, (填)充, (澱)粉, (籐)本, 排(泄), 腹(溝)細胞, (痕)跡, 有(稜), (瘡)瘡, (潤)葉樹, (瀟)過, (藍)(藻)などが目につく。

これらの中には前に言つた方式で置きかえるよりも全く別の言葉を新しく作つた方がよいものもあろう。たとえば瀟過といわずにこすといひ、腊葉といわずに押葉でよいなどである。又他の分野での決定がより重要なもの、たとえば楕円などは数学の方で決めたのに従うべきであらう。しかし生物学の方で当用漢字に加えるか又はその例外として生物学関係の教科書では使うというようするか、いずれにしても今のまゝで使つた方が廢するよりもはるかに便利であり、又將來も便宜の度が高いと思われるのは胚, 托, 囊, 鞭, 藻, 腺, 苞, 隙, 斂などであると思われる。

用語の整理は簡單のようで実は大変な仕事である。やつた結果が誰もが使わぬようなものでは仕方がない。多少の不備はあつてもやはり直した方がよかつたというものではない。本誌の讀者諸賢の御援助を願う次第である。(昭和 25 年 2 月 15 日)。

○ ヤシャブシとオオバヤシャブシ (猪熊泰三, 倉田 悟) T. INOKUMA and S. KURATA: *Alnus firma* Sieb. et Zucc. and *Alnus Sieboldiana* Matsum.

*Alnus firma* Sieb. et Zucc. なる学名は從來、オオバヤシャブシに用ひる学者と、所